私は十五年前にこの団地に生まれ、この団地で育った。

団地は丘とも呼べないくらいの高さの場所にあり、まわりは都心とは思えないほどの鬱蒼とした森に囲まれていて、団地の屋上からは新宿都庁のてっぺんがちょっとだけ見えた。

団地はこの前の昭和のオリンピックのときに建てられたそうだから、たいそう古い。縦に三つ（手前から1～3）、横に四つ（左からA～D）並んでいて（私の家はB3棟）、それぞれがまるでドミノ倒しの駒のようだ。次に大きな地震が来たら危ない、私のお姉ちゃんも、隣のおばさんもそう言っていたけれど、引っ越す人はいない。私の家と同じようにこの団地以外、どこにも行けない人たちがここにいる。

昔、昔の、戦争中、この団地ができる前、この場所では、噂によると戦争で使う毒ガスの開発が行われていたらしい。その効果を試すためにたくさんの人が亡くなったらしい。この団地の下にはたくさんの人が埋められていた、らしい。全部、隣のおばさんから聞い

た話だ。だから、夜になると団地のそこかしこには、幽霊があらわれるという噂があった。それにこの団地の屋上から飛び降りる人も多い。ここはいわゆる自殺の名所なのだ。子どもの頃は、夕暮れどきになると、団地の角や木々の茂みのなかに、誰かが立っているようで怖かった。けれど、お父さんが私が三歳のときに死に、お母さんが私が十歳のときに、お姉ちゃんと私を残して家を出てしまってから、生きている人間のほうが怖いな、と思うようになった。

私より五歳上のお姉ちゃんの七海（ななみ）ちゃんはバイトをしながら、私を育ててくれた。七海ちゃんが最初にバイトをしたのは、この団地の近所にあるパン工場で、そのバイトは今私が、七海ちゃんは夜のお仕事をしている。

今、午前九時。隣の部屋（何しろこの家には二間しかないから、四畳半の和室が七海ちゃんと私の寝室だった）で七海ちゃんは寝ている。お酒のにおいも少しする。私はそろそろバイトに行かないといけない。一人で朝ご飯を食べて、歯を磨いて、顔を洗い、七海ちゃんの化粧水を借りた。お姉ちゃんのようにメイクはしない。そもそもメイクをしていくとバイト長の永坂さんに叱られる。爪もきちんと切っておかないといけない。気がつくと爪はいつも伸びている。髪の毛もそうだ。すぐに前髪が目に入る。髪の毛は七海ちゃんに切ってもらっている。本当は美容師さんになりたい七海ちゃんだから、髪の毛を切るのは

うまい。いつも男の子くらいに短くしてもらう。ゴミ箱の中に指を入れて爪を切る。爪も髪も勝手に伸びてくる、ということを考え始めると、私の頭の中がくるくると回転し始める。伸びなくていいのにな、と思う。身長だって去年よりずいぶん伸びてしまった。去年は七海ちゃんの胸のあたりだったのに、今はもう首のあたりだ。自分のなかにある骨が自分が知らない間に伸びているのかと思うと怖い。けれど、そういう話を七海ちゃんにすると、「お母さんみたいになるからやめな」と言うので、私は七海ちゃんには話さない。お母さんみたい、ってどういうみたい？　と聞きたいけれど、七海ちゃんに聞いたことはない。

まるで死んでるみたいに眠っている七海ちゃんに、行ってきます、と小さな声で言い、私は部屋を出る。一階まで降りていくと警察官の人がたくさんいた。入口のそばにある花壇のところ。白いロープが人のカタチになっている。またか、と思った。私の住むＢ３棟は屋上に入る入口の鍵が壊れているから、この団地のなかでも特に飛び降りが多いのだ。この団地の人だけではなく、よそから来た人も飛び降りる。死んだのだろうか。頭のあたりの地面に苺ジャムみたいなものがこびりついている。多分、死んだんだろうな、と思いながら、私は自転車置き場から錆びたママチャリを出して、パン工場に向かった。

工場に着くと作業着を着てエアキャップをかぶって、全身をコロコロでほこりをとる。

それから手を洗って、アルコール消毒をして、エアシャワーして、マスクして、また手を洗ってアルコール消毒をして、手袋をして、作業場に入る。私が担当しているのは苺のロールケーキで去年、バイトを始めたときから変わらない。正方形の白い生クリームが塗られた生地の端っこに苺を均等に並べる。傷んでいたり、黴(かび)の生えている苺があったら、それを取り除き、苺を横に五つ並べる。生地を巻くのは機械の仕事で、私の隣でものすごい轟音(ごうおん)を立てている。絶対に巻き込まれてはだめ、手がなくなるよ、とバイト長の永坂さんに言われたときは、本当に怖かった。苺を並べ終えても、次々に白い生地がやってきて、バイトを始めた当初は、もたもたしていて永坂さんに叱られた。私が苺を並べ終えると、生地は自動的に機械の中に入っていく。苺、苺、苺、苺、苺。苺、苺、苺、苺、苺。最初は慣れなくて、たくさん失敗したし、立っているだけで疲れてしまって泣きたくなった。けれど、このバイトは人と話さなくていいからいい。苺を並べているだけでいいんだから。コンビニで三日間だけ働いたこともあるんだけど、あんなに大変でいろいろな仕事を瞬時にこなすなんて私には無理だ、と思い知らされただけだった。

　お昼になると工場のサイレンが鳴る。みんなで食堂に行く。作業着は脱いでもいいんだけど、エアキャップはかぶっていないといけない。最初はみんなのその姿がおもしろくて、私は心のなかでくすくすと笑った。食堂では、工場でできた、売り物にはならないパンが

食べ放題なのもこのバイトの魅力だった。テーブルの上の籠には、揚げすぎたカレーパンや、つぶれたロールケーキの端っこが山盛りになっている。私は車に轢(ひ)かれたみたいにぺしゃんこになったクリームパンをひとつ取って囓(かじ)った。パンは毎日食べても飽きない。本当は持ち帰りは禁止なのだけれど、ほとんどのバイトのおばさんやおじさんは、持参のビニール袋にできそこないのパンをぎゅうぎゅうに詰めて持って帰る。私もバイトを始めた頃、七海ちゃんにロールケーキの端っこを持って帰ったことがある。甘いもの好きの七海ちゃんだから、喜んでくれるはず、と思ったのに、七海ちゃんはそれを見てわんわん泣いた。工場で、とあるおばさんにいじわるをされたことを思い出したのだと言う。七海ちゃんは巨大なボウルにたっぷり盛られた生クリームをそのおばさんに投げつけて、バイトをやめたのだそうだ。だから、七海ちゃんは私がパンやケーキを持って帰っても口にしようとはしなかった。

私がクリームパンを紙パックのミルクで飲み下していると、永坂さんが来て「学校で食べな」とビニール袋にはいった、つぶれた苺サンドとジャムパンを手渡してくれた。毎日そうだ。ありがとうございます、と私が頭を下げると、永坂さんは満足そうに体を揺らして、自分のテーブルに戻っていった。昼ごはんを食べて、少し休憩して、みんなでまた作業場に戻る。そして、二時間働いて、私は団地に戻る。

Ｂ３棟に戻ると、類君が入口のところでしゃがんでいるのが見えた。私の家の下に住んでいる男の子だ。いくつなのかは知らない。だけど、幼稚園や保育園には行っていないみたいだ。この時間、ここにいることが多い。類君のほっぺには、赤い指のあとがあって、膝のところからは血が出ていた。類君はいつもどこかを怪我している。「大丈夫？」と聞いてみたが、類君が声を出すのを聞いたことはない。もしかしたら、話ができないのかな、と思う。去年から同じ黄色い長靴をいつも履いていて、右足のほうの先っちょがめくれ、親指が顔を出している。靴も洋服もどろんこ遊びをしたみたいに汚れてる。類君自身もそうだ。伸びっぱなしの髪の毛はホームレスのおじさんみたいにベタベタとして、所々固まっているし、そばに近づくと、雨に濡れた野良犬みたいなにおいがする。類君の視線は私が肩にかけているトートバッグにあって、今にも噛みつきそうな目をしている。私は永坂さんにもらったビニール袋からジャムパンをひとつ取って、類君に渡した。類君はその場でむしゃむしゃとパンにかぶりつく。類君はいつもおなかを空かせている。類君がいっしょに住んでいるはずのお父さんやお母さんの姿を見たことはない。

私は慌てて階段を上がり、自分の家に飛びこんで（そうしないと類君はどこかに行ってしまうから）消毒液と絆創膏（ばんそうこう）を持ってきた。類君はもう最後の一口を口に入れようとしていた。私は仕方ないなあ、と思いながら、ビニール袋に入っている苺サンドも手渡した。

苺サンドにかぶりついている類君に階段に座るように言って、私は血が出ている膝に消毒液を吹きかけた。血とともに汚れが浮いて出た。私はそれをティッシュで拭って、もう一度、消毒液を吹きかけ（類君は苺サンドに夢中で、顔をしかめたりもしない）百円ショップで買ったキティちゃんの絆創膏を貼ってあげた。類君は多分男の子だと思うのだけれど（青い機関車のTシャツを着ているし）ほんとうのところはわからない。はい、と私が絆創膏の上から類君の膝を叩くと、類君は苺サンドを手に、ぴゅーっとどこかに駆けていった。類君はいつもおなかをすかせているか、怪我をしているか、走っているかの、どれかだ。

ふらふらになりながら、もう一度自分の家のある三階まで階段を上がる。

午前中に二時間、午後に二時間しか働けないのは、私の体のせいだ。立ち仕事をしていると、すっかり疲れてしまって夜の学校に行けなくなる。だから、夜の学校に行く前に、私は団地の部屋で（とはいっても七海ちゃんが寝ている隣にある居間兼ダイニングの四畳半）少し体を休める必要がある。眠れるわけではないけれど、体を少し横にしていると楽になる。悪い病気ではない。喘息だ。子どもの頃からそうだった。季節の変わり目になると、肺の奥のほうからヒューヒューと変な音が聞こえて、息がしにくくなる。本当はネブライザーという赤い大きなかたつむりみたいな器具に入った薬を予防的に吸わないといけ

ないのだけれど、お金がもったいなくて、私は発作が起こりそうになったときだけそれを使っている。

あれは中学生の頃だったか。真夜中に息ができなくなって七海ちゃんと二人で救急車に乗ったこともある。七海ちゃんは私が働くから、みかげは家にいるだけでいい、と言うけれど、我が家の財政事情を考えれば、七海ちゃんだけを働かせておくわけにはいかない。七海ちゃんは夜のお仕事のことを話さないけれど、それは多分、男の人とお酒をのんだりする仕事で、七海ちゃんがあんまりその仕事をしたくない、ということも知っている。七海ちゃんを早く美容師さんの学校に行かせてあげないといけない。だから、私はバイト代をそっくりそのまま七海ちゃんに渡していた。それでも七海ちゃんはそこから、みかげのお小遣いと言ってお金を渡してくれる。私はそれをそのまま、クマの貯金箱に貯金していた。

隣の部屋の七海ちゃんはまだ眠っている。細切れにしか眠れない私と違って、七海ちゃんの眠りは長く、深い。真夜中や明け方近くに帰ってきて、仕事の準備を始める午後六時くらいまで眠っている。私は七海ちゃんを起こさないように四畳半の襖(ふすま)をそっと閉めた。畳に横になる前に、テーブルで、昨日、学校で出された宿題を始めた。勉強を始めると、頭がぼうっとする。パン工場の仕事で疲れているせいもある。英単語も数式も、どう考え

ても、私のこれからの生活に必要ないものだと思うのだけれど、それでも私は頑張って宿題をこなす。夜の学校の授業はゆっくりで、私のとろい頭でもついていける。そのことがうれしかった。まだ昼間の学校に通っていたときには、先生の話にもクラスメートの話にも早すぎてついていけず、黒板を見ていると、白い文字がゆらゆらと涙で揺れたし、クラスメートに話しかけられてもうまく返すことができなかった。小学校の頃からそうだった。いじめる人は、いじめられる人を一瞬で見つけてしまう。まるでサバンナにいるヒョウのよう。中学のときは、七海ちゃんが学校に乗り込み、先生たちと喧嘩までしてくれたけれど、事態は一向に収まらなかった。それでも私は学校のことが嫌いじゃなかった。高校に入ったら、こんな馬鹿ないじめなんて、みんないい加減に飽きると思っていた。でも、それは楽観的過ぎた。教科書や上履きや体操服は、相変わらず、隠され、汚され、カッターでズタズタにされたし、みんなが私のことを無視することには変わりがなかった。ある日、喘息の発作が出て、ヒューヒューと息をしながら、教室の床に倒れている私には誰も目もくれず、クラスメートたちが次々に跨いでいったとき、もう、いいか、と思った。この場所は私がいるべき場所ではないのだ。それから、お姉ちゃんと先生が相談して、夜の学校に通うようになった。

夜の学校には、私より随分と年上のおじさんとおばさんもいたし、私のようにいじめと

かで昼間の学校に行けなくなった子や、昼間に働いている子も予想以上にたくさんいた。昼間の学校と違うのは、みんな学校に勉強をしに来ているということだった。私が通っていた昼間の学校のみんなは、勉強より、恋愛とか、いじめとか、夜遊びに忙しかった。夜の学校の人たちには、誰かをいじめる余裕なんてない。自分がいじめられていたのに、誰かをいじめる人もいない。自分のことにみんなが一生懸命だから、ほかの人にかまう余裕もないのだ。教室のすみっこに座っていても、もう黒板の文字はぐらぐらと揺れなくなった。

それにうれしかったのは、夜の学校に入って、私にほとんど初めてといっていい友だちができたことだった。里牟田（さとむた）さんという同じクラスの女の子（私はむーちゃん、と呼んでいた。むーちゃんからそう呼んでくれと小さな声で頼まれたからだ）。むーちゃんは倉梯（くらはし）君という男の子の友だちを私に紹介してくれた。倉梯君とむーちゃんは夜の学校に通い始めてからの友だちのようだった。休憩時間も給食のときも、いつも三人で過ごしていた。けれど、おしゃべりをして互いをよく知る、といったつきあい方でもない。そもそも、三人とも口数は少ない。でも、二人ともどこか私に似ているような気がした。聞いたことはないが、むーちゃんも倉梯君も昼の学校でいじめられていたのかな、と思うことがある。むーちゃんは私をみかげ、倉梯君は私をみかげさん、と呼んだ。

むーちゃんは昼間はコンビニのバイト（私が挫折したあの難しい仕事！）を、倉梯君は特に何もしていないようだった。工場のパンやケーキを持って行くと二人は喜んだ。

倉梯君は、

「あ、だ、だ、だから、みかげさんは、じゃ、じゃ、ジャムみたいな、く、く、クリームみたいなにおいがするのか」と言った。倉梯君は話すとよくこうなった。昼の学校なら、倉梯君のしゃべり方は絶対にいじめの的になったはずだけれど、だからこそ私は倉梯君を馬鹿にするようなことはやめようと心のなかで誓った。それはむーちゃんも同じようで、倉梯君が話し始めたときは、二人して根気よく、話を終えるのを待った。

今日も二人に会えると思うとうれしかった。そう思いながら、やっかいな宿題を片付けた。昼間は真夏みたいに暑かったけれど、窓から涼しい風が入ってくる。少し横になろうと、タオルケットにくるまってごろごろした。ふと、ベランダに干したままの洗濯物が目に入った。もう乾いているはずだ。あれを取り込まなくちゃ、とベランダに出た。

Ｂ２棟とＣ２棟の間には、小さな庭とも公園とも呼べないくらいの土だけの空間があって、本当はいけないのだろうけれど、勝手にきゅうりやトマトを植えている人もいた。そこに目をやると、一人のおじいさんと目が合った。ラジオ体操のように腕をぐるぐる回したり、ジャンプしたりしている。おじいさんが手招きする。自分のことではないだろうと、

左右に目をやると、おじいさんが叫んだ。
「みかげ！　みかげ！」
　自分の名前をいきなり呼ばれて、私はびっくりしておじいさんを見つめた。おじいさんが黒い大きな手のひらで手招きする。やっぱり自分のことではないだろうと、少し心が痛んだけれど無視をしていると、またおじいさんが、
「みかげ！」と私の名前を大きな声で呼ぶ。団地には少し壊れてしまった老人がいるので、おじいさんもその一人だろうと思った。ほかの誰かと勘違いしているのだ。それでも、何度も名前を大声で呼び、
「ここに来なさい！」と叫ぶ。七海ちゃんが起きてしまうと思った私は思わず頷(うなず)いて、サンダルをつっかけて部屋の外に出た。やめてください、と言いに。階段を降りて、おじいさんの元に駆けつけると、「１！　２！　３！」と大きな声で言いながら、腕をぐるぐる回している。
「あの、私はたしかにみかげですけど、大きな声で呼ぶのはやめてください」と言いたかったのに、勇気がなくて言えなかった。おじいさんは私に向かって叫ぶ。
「みかげ！　部屋でだらだらと過ごしていたらだめだ！　喘息には体力をつけること！　ほら、こんなふうに体を動かすのだ！」

なんでそんなこと知っているのだろう。おじいさんは白い（ところどころに、赤や茶色の何かの染みがあった）Tシャツを着て、青いジャージを穿(は)いている、ジャージの横には黄色い縦のライン。どこかの学校のジャージみたいだ。

「ほら、こんなふうに！」

おじいさんは小さくジャンプした。私はサンダル履きのまま、その場で小さくジャンプした。

「いいぞ！　ほら！　もっとこんなふうに！」

おじいさんは、今度は両腕で勢いをつけて、上半身をぐるりと回す。私もそれを真似した。夜の学校でも体育はあるけれど、私は休むことも多かった。少し激しい動きをすると、肺の奥のほうでヒューヒュー音がするからだ。だけど、今はそんな音はしなかった。おじいさんの動きがあまりにゆっくりだったからかもしれない。

なんで私、ここで体操しているんだろう、と思いながら、それでもおじいさんを真似て体操を終えると、軽く息が上がった。おじいさんはそばにある畑から、トマトをいきなりもいで、私に投げてよこした。私はそれを不器用に受け取る。おじいさんがトマトにかぶりつく。プシャーと赤い汁が白いTシャツに飛んだけれど、おじいさんはまったく気にしていないようだった。